

VII 成果と問題点

1 生洩2遺跡出土の縄文時代晩期土器について

生洩2遺跡では、7341点のV群土器が出土した。これらは縄文時代晩期前～中葉に属するもので、出土層位からも新旧が確認されている。ここでは、前葉の資料(V群a類)と中葉の資料(V群b類)の内容および編年の位置について考察する。

(1) V群a類

口縁部などに連続爪形文を施すものを主体とし、北海道南西部で上ノ国式と呼称されている土器形式に相当する。上ノ国式は上ノ国町竹内屋敷遺跡(大場ほか 1961)を標識遺跡とし、乙部町小茂内遺跡、奥尻町青苗B遺跡(木村ほか 1999)、寿都町朱太川右岸6遺跡(内山 1985a)、蘭越町港大照寺遺跡(竹田・土屋・大島 1978)、泊村堀株1遺跡(河野・小柳 1992)、余市町沢町遺跡(宮 1989)など檜山・後志地方の日本海側に濃密に分布する。上ノ国式の編年の位置は、これまで大洞B-C式並行、大洞C₁式並行、あるいは両形式にまたがるとの諸説があった。爪形文自体は、後期後葉の堂林式・三ツ谷式の突瘤文の系譜にある伝統的な文様要素で、後期末葉～晩期初頭の御殿山式から用いられている。古い時期のものはマクレのある深い爪形文で、次第にマクレのない浅い爪形文へと変化し、最後は刻目あるいは刺突列になるようである。文様帯は胴部まで及んで施文されていたものが徐々に狭まり、口縁部に偏るようになる。上ノ国式の主体となる時期は、朱太川右岸6遺跡や沢町遺跡などで羊歯状文をモチーフとして爪形文を文様要素として組み込んだ個体が出土していることから、大洞B-C式に相当する時期であろう。本遺跡で出土した上ノ国式は、マクレのない爪形文が大半で、文様帯が口縁部に集中している。このことから、比較的新しい時期のものと考えられる。隣接する太櫓川尻遺跡でも、同時期の、平行沈線で区画された爪形文列が施された大型の鉢、透かし窓のある無文の台付き土器が採集されている(第Ⅱ章第2節)。

(2) V群b類

深鉢・鉢・浅鉢などの口縁～頸部に数条の平行沈線を巡らし、その内部に刺突列を加えるものを主体とし、従来浜中大曲式と呼称されてきた土器形式に相当する。浜中大曲式については別に本章第2節で考察するが、ここでは本遺跡の遺物集中を中心に出土した土器群の内容について検討する。

今回V群b類を口縁～頸部の文様により1～8種に分類した(図Ⅶ-1-1・2)。まず、各種の土器の特徴・傾向を、器種構成、器形、文様、地文などについて述べる。

① 器種構成

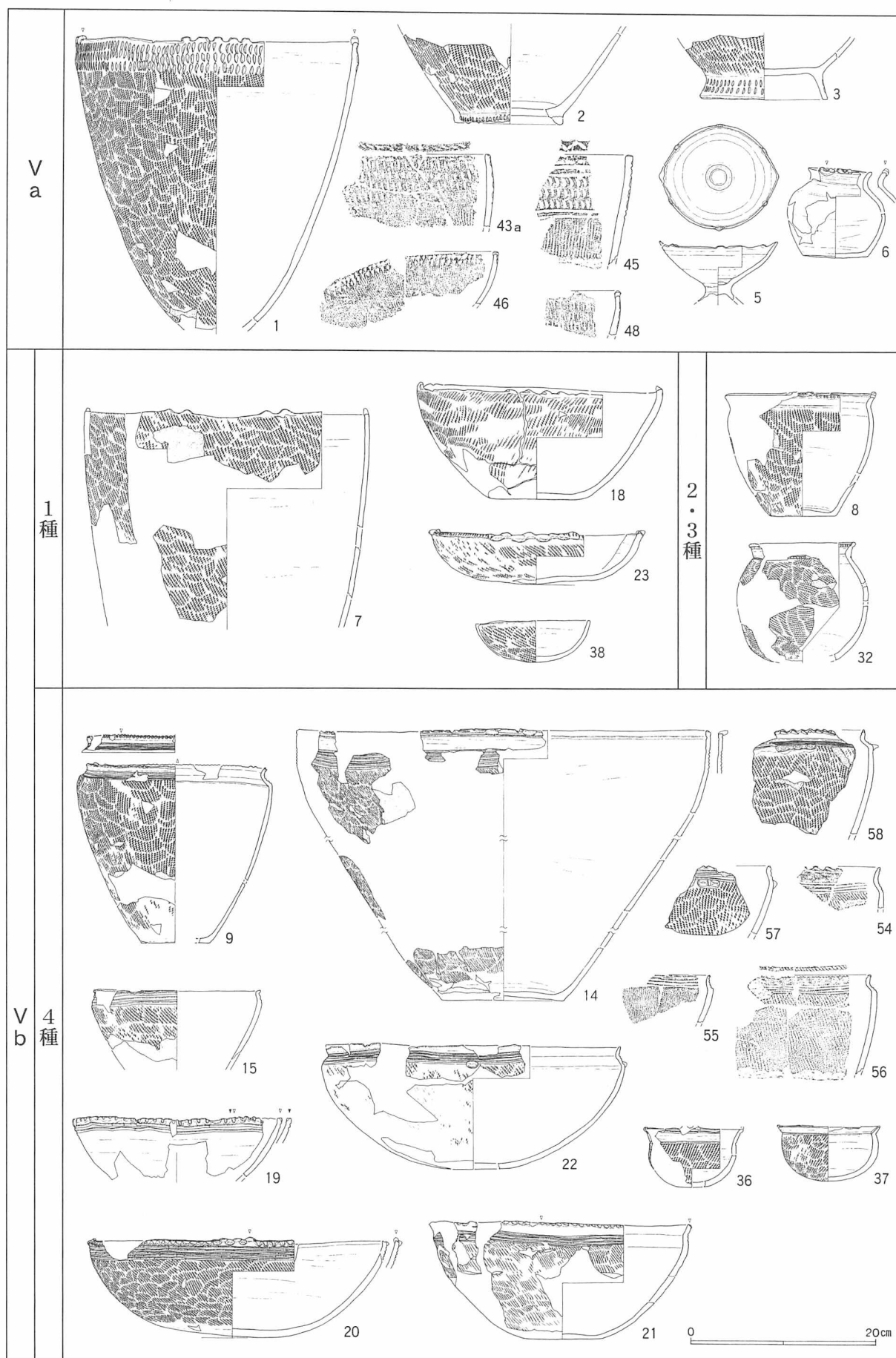
1・4種は深鉢・浅鉢が多く、鉢・台付き土器が少ない。2・3種は個体数が少ないため、構成は不明である。5・6種は深鉢・鉢が主体で、浅鉢が少ない。また、台付き土器の比率が高くなる。7種は非常に少なく、皿・台付き土器がある。8種はミニチュア土器にのみ見られる。

② 器形

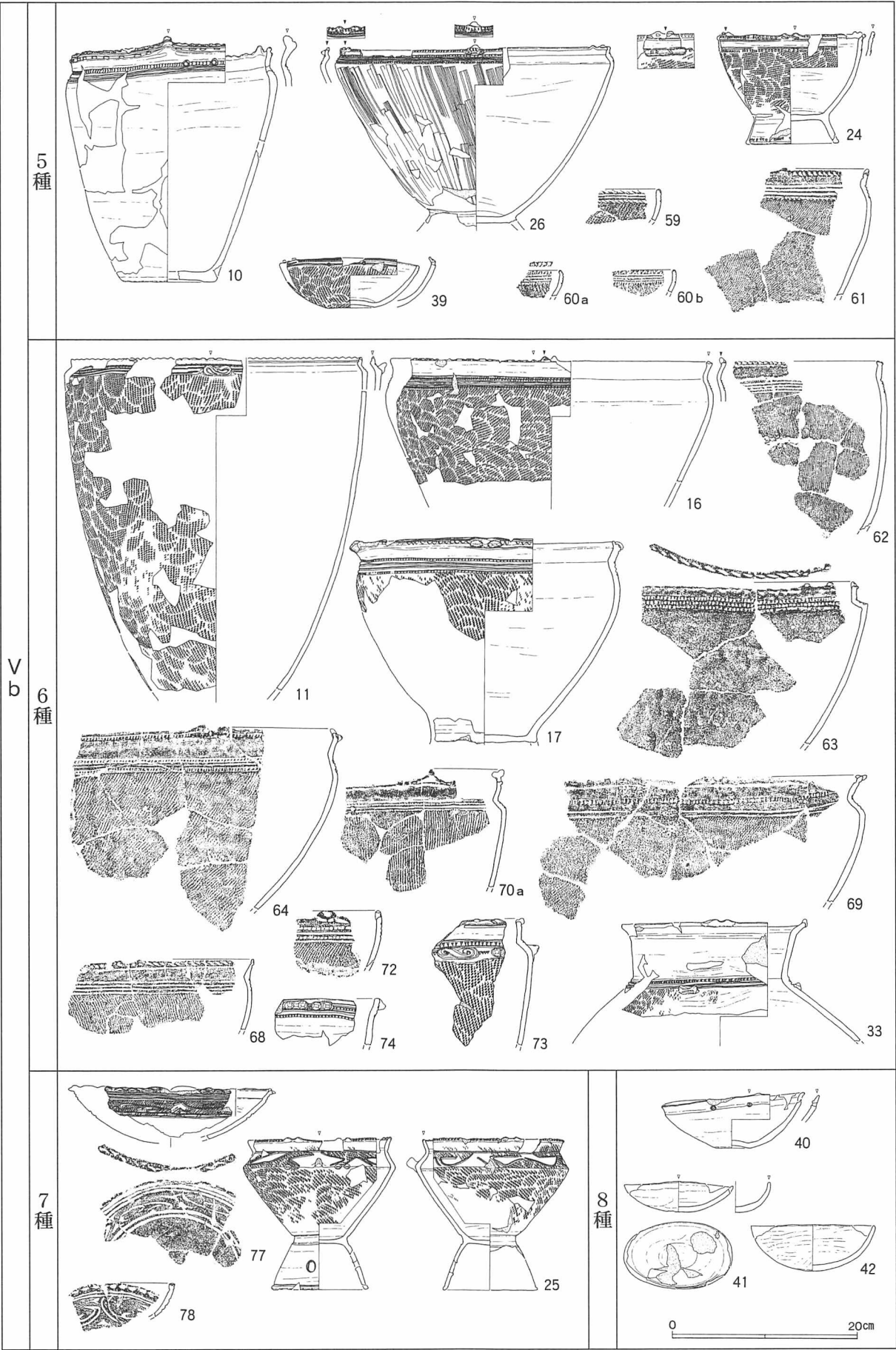
1種は口縁部が垂直もしくはやや開きぎみに立ち上がるものが多い。2・3種は頸部の括れが見られ、口縁部が外側へ大きく開くようである。4種の器形も基本的には1～3種と同じものが見られるが、口縁部がやや窄まる傾向がある。5・6種は頸部の括れが大きくなり、肩部が張り出してくる。

③ 文様

1種は縄文のみで文様帯をもたない。2～4種は口縁部の文様帯が非常に狭く、無文帯が見られないものもある。5・6種では、無文帯の幅がやや広くなる。刺突列は、縦または斜め方向から刻むも



図Ⅶ-1-1 生淵2遺跡のV群土器(1)



図Ⅶ-1-2 生淵2遺跡のV群土器(2)

のと横方向から連続して密に刺突するものがあり、5種は前者、6種は後者が多い。7種には沈線で区画された雲形文やネガ文様が見られるが、土器群全体では主体となる文様要素ではない。

④ 地 文

1～5種は斜縄文が多い。5種には縦走する条痕文を施した台付き土器が1個体のみある(26)。6種は縦走縄文が主体となる。斜縄文も見られるが、やや施文が乱れたものが多い。原体は単節RLが高い比率で用いられる。各種とも少数ではあるが、地文が無文なものを含んでいる。

これら8種は遺物集中では一体となって土器群を形成しているが、放射性炭素年代測定の結果では内部で時間差がある可能性が高い。そこで、遺物集中の出土状況について、A、B、Cの各群でこれら8種がどのようなセット関係にあるのか、出土位置に微妙な上下がなかったかを再確認してみる。

A群は1・4～8種が出土し、2・3種は見られない。B群は1～7種が出土し、8種は見られない。C群は4～8種が出土し、1～3種は見られない。8種は非常に個体数が少なく、特殊な用途が想定されるので、各群の主要な構成要素としては省かれる。1～7種を比較すると、A群とC群はほぼ同じ構成で、2・3種を欠いて4～6種が主体となる。一方で、B群は1～7種のすべてが内包されている。A・B群で得られた放射性炭素年代測定値の時間幅から、1～7種には時期差が存在し、4～6種は中でも後半に位置する可能性が高い。このことを検証するため、各群内部で出土位置より新旧を推測する。A群では10(5種)が77(7種)よりも上位で出土している。また、16(6種)は18(1種)よりも上位で出土している。B群では17(6種)と26(5種)はほぼ同じ高さで、7(1種)・8(2種)・21(4種)よりも上位である。C群では24(5種)が9(4種)よりも上位で出土する例が認められる。以上の点から、1・2・(3)→4→7→5・6という変遷が想定される。

本遺跡出土のV群b類の編年的位置は、①赤彩された精製土器(77)に施された文様帯が幅狭で、雲形文が平行化していること、②地文に条痕文が施された台付き鉢(26)が見られること、③独立並置型ネガ文様(高橋 1993)が施された台付き鉢(25)が見られることから、おおむね大洞C₂式古段階に相当すると考えられる。77は津軽海峡周辺からの搬入品と推測され、縄文の繊細さや胎土の緻密さなどの点でも他と異なる。26はいわゆる「桃内式」(名取・松下 1964)に属し、東北地方の晩期中葉の条痕文土器との関連が指摘されている(竹田・土屋・大島 1973、鈴木 1996)。25は石狩市シビシウス第4遺跡(石橋編 1979)でも類似資料が出土しており、このネガ文様が浜中大曲式を大洞C₂式並行に位置付ける根拠の1つとされる(福田 2003)。ただし、本遺跡のV群b類には前述の変遷が認められるため、やや古い段階のもの(大洞C₁式新段階?)を含む可能性がある。

2 いわゆる「浜中大曲式」土器について

(1) 研究史

浜中大曲式は、余市町大浜中遺跡を標識遺跡とし、吉崎昌一氏らによって仮称されたが、報告書作成前に資料が焼失したため、その内容は長い間不明であった(吉崎 1965)。1978年、石狩市シビシウス第4遺跡において墓に伴う良好な一括資料が出土したことから(石橋ほか 1979)、現在はこれが標識として認知されている(林 1981、野村 1984)。その内容は、口唇に刻みを加え、口縁部に数条の平行沈線を巡らし、その内部に連続する刺突列を施した鉢、浅鉢、肩部が強く屈曲した壺、雲形文が施された台付き鉢、皿などである(図Ⅶ-2-1)。林謙作氏は北海道における縄文時代晩期土器を、「亀ヶ岡式土器そのもの、あるいは若干の地方色を帯びた土器」、「亀ヶ岡式土器の影響のもとに成立した在地的な要素の強い土器」、「亀ヶ岡式土器の影響の影響がまったく認められない北海道固有の土器」の3つに区分し、それぞれ「大洞系」、「類大洞系」、「非大洞系」と呼び、時期によりこ